学図 小国304

文部省検定済教科書

財団法人 教育図書研究会編修

教育學部
資料室

三年生の
国語
上

小KC
G16

学校図書株式会社発行

60307
教科書文庫
6
810.
34-1949
01304
49766

寄贈
教科書文庫
6
810
34-1949
0130449766

昭和二十四年十月十日文部省検定済小学校国語科用

三年生の国語 上

広島大学図書
0130449766

廣島大學
教育學部圖書

学校図書株式会社

中央図書館

先生がたへ

(一)本書の編修方針

(1)編修にあたっては「学習指導要領」(国語科編)を基礎とし、更に、(イ)「検定基準」(ロ)カリキュラム構成及び国語教育に関する最新の研究、(ハ)望ましい教科書についての世論調査、(ニ)児童の言語生活の実態調査、(ホ)進歩した外国教科書の比較検討の結果などを参考としました。

(2)編修者によって選ばれた材料は、更にこれを実際に児童に実験し、また、教育学者、心理学者、言語学者、文学者、教育実際家などの意見を徴して、修正を重ね、完璧を期しました。

(二)本書の特色

(1)単元的構成　各単元は、児童生活の展開、国語科の特色、並びに地域性への適応を考慮して、周到に選ばれております。従って全国いずれの学校でも、児童の生活に即し、他教科と有機的関連をもった国語教育を、有効適切に行うことができます。

(2)「生きたことば」の指導　児童の日常生活における「生きたことば」を教材としてとりあげ、溌剌とした言語学習が系統的に営まれるように工夫してあります。従って、「読み」「書き(作り)」「聞き」「話す」力を一体的に養いながら、ことばそのものに対する関心と興味を次第に深めることができます。

(3)児童の興味の重視　児童の興味を重視して、明るく、楽しい読み物としての生活を具えていることも、本書の特色の一[illegible]ます。児童の経験を広め、感情を豊[illegible]ために、多方面の材料が準備されて[illegible]

(4)表現の吟味　表現は明確平易[illegible]に親しまれやすいように工夫しました[illegible]及び語彙の提出方法にも注意をは[illegible]ージにおいて、新語並びに新出文字[illegible]く三つ以上に出ないように努めました[illegible]

(5)新しい生活態度の養成　それ[illegible]性を伸ばすとともに、広く社会人[illegible]同性を培い、民主的な生活態度を身につけさせるための材料が豊富に採られております。

(6)補助材料の準備　本書をより有効に使用するために、教師用書、児童用ワーク・ブック、朗読レコードなどの補助材料の編修を企画しております。

広島大学図書
0130449766

もくろく

一　手をつなごう……四
こどもの村……四
一つのボール……八
とけい……十七

二　わかばのころ……二十五
うさぎさん……二十五
かいこのゆめ……三十二
かまきりのたんじょう……三十九

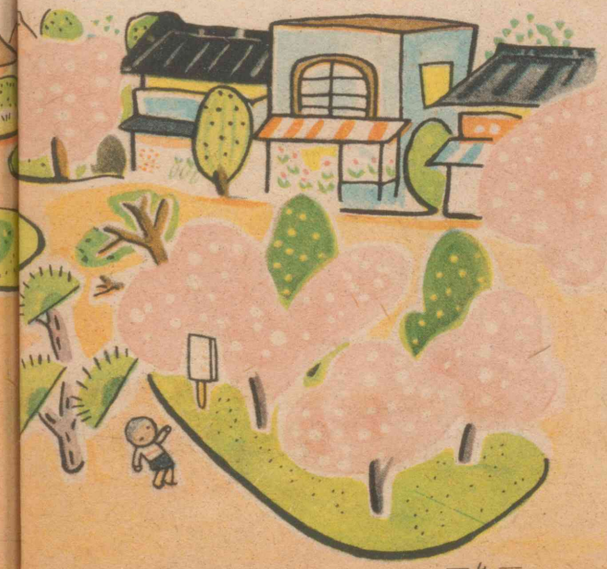
三　きれいな水……五十二
泉……五十二
水遊び……五十四
山の子、海の子……五十七

四　げき……七十五
星とおにたち……七十五
ことばの表……九十四
かんじの表……九十六

手をつなごう

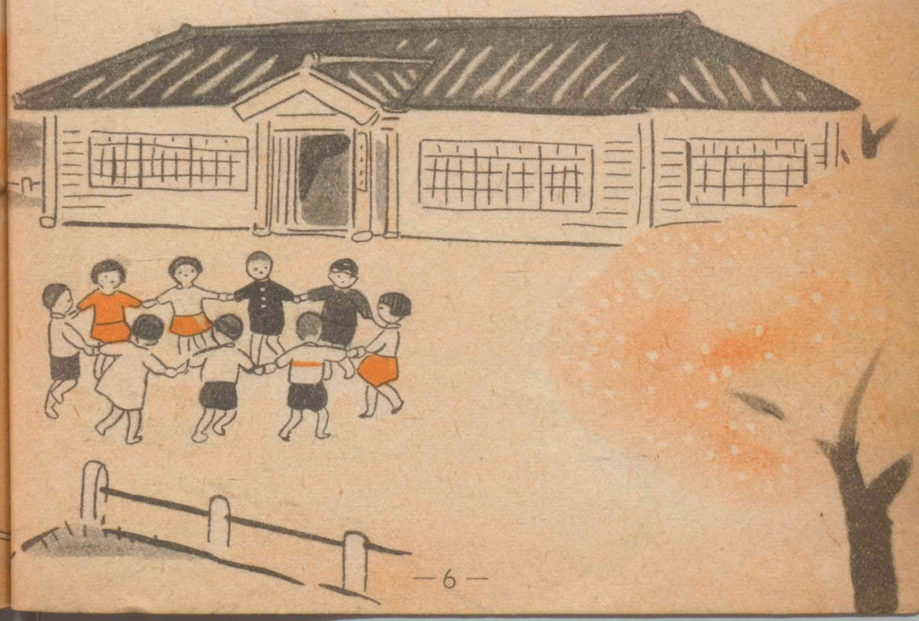
こどもの村

みんなでつくろう、
こどもの村を。
村のまわりに、
さくらをうえて、
あちらこちらの、
にわ木のかげに、
きれいなおみせを、



たくさんつくる。
ほんやに、さかなや、
はなやに、やおや。
それから大きい
ひろばをつくり、
池にすいすい
ひごいがおよぐ。
お花うえたり
ベンチもおいて、
白いペンキの
たてふだたてる。

おかの上には、
やくばをつくり、
村長さんは、
せんきょできめる。
村のそうだん、
みんなでよって、
なかよく話して、
なんでもきまる。
こどもの村は、



なかよし村だ。
毎日、よい日の、
お天気つづき。
ぴいちく、ひばりが、
空からないて、
さいたさくらに、
かすみがなびく。
こどもの村を、
みんなでつくろう。

一つのボール

―学級日記から―

四月八日　木　晴　（きむら　みのる）

ぼくたちの学級には、フット・ボールが一つあります。それは、みんなのおとうさんや、おかあさんが、きふをしてくださったものです。

ボールは一つですが、それをつかってあそびたい人はおおぜいです。それで、よくうばいあいがおこります。

きょう、じち会をひらいて、ボールのつかい方について、そうだんをしました。

(1)おとことおんなと、一しゅうかんずつ、つかう。

(2)おとことおんなと、一日おきにつかう。

(3)おひる休みと、ほうかごとにわける。

こんないけんが出ましたが、(2)にきまって、月水金はおとこ、火木土はおんなが、つかうことにきまりました。

四月十五日　木　くもり　（おがわ　ふみこ）

じゅぎょうがおわるとすぐ、いしかわさんが、ボールをかかえて、うんどうじょうへとび出そうとしました。

私たちは、

「あら、きょうは、女子のばんよ。」

「かえしてちょうだい。」

といって、さわぎましたが、いしかわさんは、

「だめ、だめ。きょうからは、とくべつだよ。」

といって、かえしてくれません。

じち会のいいんの、おおのさんがそれを見つけて、

「かえしてやりたまえ。」

といって、いしかわさんの持っているボールをとりかえそうとしました。いしかわさんは、

「なんだ。いばるない。」

といって、わたすまいとして、うばいあいをはじめました。

みんなはびっくりして、二人をわけました。

やまださんは、いしかわさんをこしかけにすわらせて、ききました。

「ボールをつかうじゅんばんをきめたのは、だれだい。」

「みんなで……」
「おおのくんは、みんなできめたことを、きみにまもらせようとしたんだろう。それが、どうして、いばってることになるんだい。」
「……」
いしかわさんは、しばらくだまっていましたが、やがて、きまりわるそうにいいました。
「あのね。らいしゅう、二組と、キック・ボールのしあいをすることになったろう。かえるしたくをしながら、ぼく、そのことを思い出したんだ。『さあ、ぐずぐずしてはいられない。きょうから、せんしゅは集まってれんしゅうしなきゃ』そう思って、むちゅうになっていたものだから、ついらんぼうしちゃったんだ。ごめんね。」

といって、あたまをさげました。
「なあんだ。そうだったのか。」
「いしかわさんったら、じぶんひとりあわてて、だまって、とび出したりするからいけないのよ。」
おおのさんも、私たちも、みんなわらいだしてしまいました。
いつも、こっけいなことをいって、みんなをわらわせるはやしさんが、

おおのさんと、いしかわさんの手をにぎらせて、それを高くあげて、

「くもり、のち、晴」

といったので、わらいは、もっと大きくなりました。

「じゃあ、きょうから、しあいのおわるまで、いつもほうかごは、せんしゅの方につかっていただくことにしたらどうでしょう」。

私がふと思いついていうと、みんなも大さんせいでした。

「ありがとう」。

「ありがとう」。

いしかわさんも、ほかのせんしゅも、うれしそうでした。

四月二十一日　水　晴　（はやし　まさお）

きょうは、三年の一組と二組とで、キック・ボールのしあいをしました。

ぼくたちの方は、一回に二点入れたきりですのに、二組の方は、つづけて四点も入れたので、気が気ではありません。

「がんばれ」。「がんばれ」。

みんな、いっしょうけんめいに、おうえんをしました。

さいごの　五回せんの時も、一点も入れないまま、二人までアウトになったので、「もうだめかな」。とあきらめて

いると、いしかわくんがみごとな三るいだをけりました。

いちどに三点もはいって、とつぜん、ぼくたちの勝になったので、

「一組ばんざあい。」

「いしかわくん、ばんざあい。」

ぼくたちは、おどりあがってよろこびました。

らいしゅうのけっしょうせんにも、ぜひ勝ちたいと思います。

	一組	二組
1	2	1
2	0	1
3	0	2
4	0	0
5	3	0

とけい

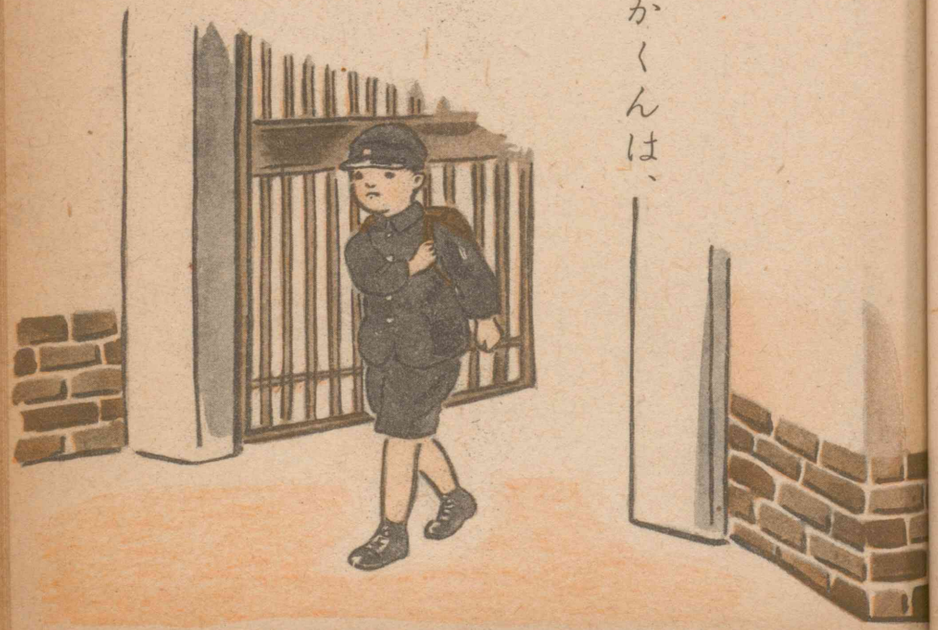
学校の門を出たとたんに、ゆたかくんは、

「ちえっ。」

といって、右手を右から左へふった。

「あんなおしばいなんか、なんだい。」

こんどは、足もとの石ころをつかんで、道ばたのまつの木に



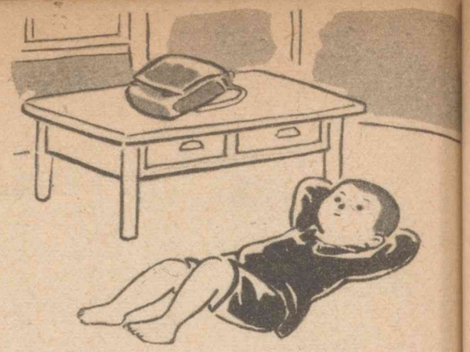
なげつけた。石ころは、まつの木にぶつかると、コロコロと、生きもののようにころがってきた。ゆたかくんは、それを右足でポーンとけとばした。

「ゆたかくーん」

だれか、うしろからよぶものがある。ゆたかくんは、あわてて、すぐ近くの家のかげにかくれた。

なかよしのきよしくんが走ってきて、そこらを見まわしながら通りすぎてから、ゆたかくんは、ひとりぼっちで、あるいていった。

つくえの上にかばんをなげ出したゆたかくんは、たたみ



の上にごろりとよこになって、ほっと、ためいきをついた。

が、まもなく、ゆたかくんは、またおきあがると、かばんをひらいて、中から小さな本をとり出した。

とうしゃばんでいんさつした、「朝の道」という、おしばいの本だ。

はじめのはなしでは、ゆたかくんは、このおしばいのしゅやくになるはずであった。それが、きょう学校でとうひようしてみると、ただひとこと、「おはよう」といって、ぶたいを通りすぎるだけのやくになってしまったのだ。

「なんだ。あんなおしばいなんか、やめてしまえ。」
ゆたかくんは、また、本をなげ出して、ごろりとあおむいた。

「ごはんですよ。ゆたかさん。」
おかあさんによばれて、ちゃのまにはいると、もう、おとうさんも、おぜんについていらっしゃった。
「いただきます。」
三人は、はしをとった。
「いや、きょうは、大しっぱいをしたよ。」
ふいに、おとうさんが話しだした。

「どうなさったのですか。」
「けさ、うちを出て、いつものように、うでどけいのねじをまわしたんだ。ところが、ちょっとちょうしがくるって、ピチンと、とまってしまった。」
「どうしたのでしょう。ぜんまいがきれたのでしょうか。」
「そうだよ。あのとけいは、わたしが中学校を、そつぎょうした時に、おじいさんにいただいたものだった。あれから、もう何年になるかなあ。ず

いぶん長い間、まっくらな、小さなへやの中で、コチコチと、きかいを動かしてきたぜんまいだ。

「ほんとうにそうですね。……それで、とけいはどうなさいましたの。」

「会社のすぐ近くのとけいやにたのんでおいた。二三日したら、なおるだろう。」

ふいに、ゆたかくんがいった。

「おとうさん、そのきれたぜんまいは、どうしたのですか。」

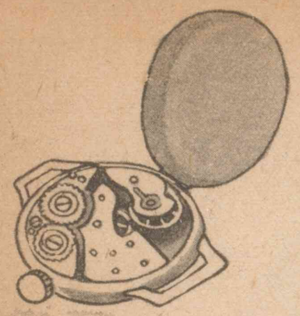
「とけいやさんにたのんで、とっておいてもらうことにしたよ。あたらしいぜんまいととりかえたら、おとうさんは、そのきれたぜんまいをもらって、だいじに、きねんにとっておこうと思うのだ。

十年でも、二十年でも、人の目につかない、くらい、小さなへやで、ただコチコチとはたらくぜんまい。これは、おとうさんのよいおてほんだよ。このうちでいうと、おかあさんが、ちょうど、ぜんまいのようなものさ。」

「まあ、わたしがぜんまいですか。」

「そうだよ。いいぜんまいだよ。ははは。」

おとうさんがわらうと、おかあさんもわらいだした。



ゆたかくんは、はしをおいて立ちあがった。
「まあ、ゆたかさん。どこへいくの」。
ゆたかくんは、それにはこたえずに、じぶんのへやにくると、さっきなげ出したかばんをきちんとかたづけた。
それから、さっきの本を、たたみの上からひろいあげて、じぶんがいう、「おはよう」ということばのところをあけてみた。
それをつくえの上に、ていねいにおくと、ゆたかくんは、にっこりわらって、ちゃのまへいそいだ。

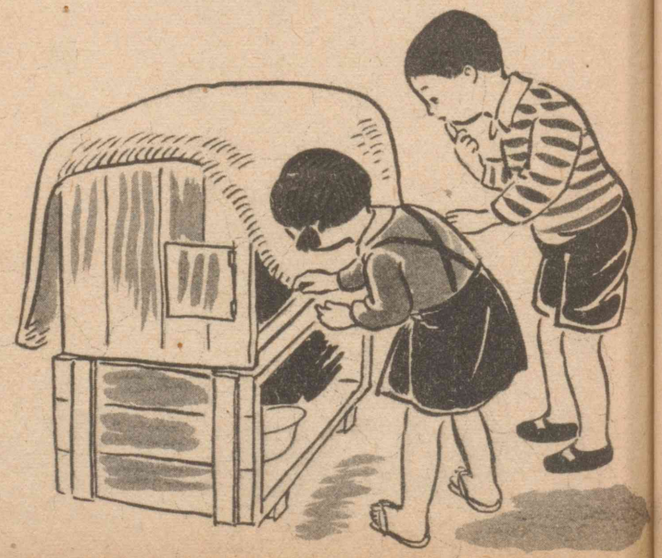
わかばのころ

うさぎさん

朝ごはんのあとで、えんがわで、ざっしをよんでいると、にいさんが、うさぎ小屋の方から、にこにこして、走っていらっしゃいました。
「ふみ子、うさぎの子がうまれたよ」。
「えっ、ほんとう」。

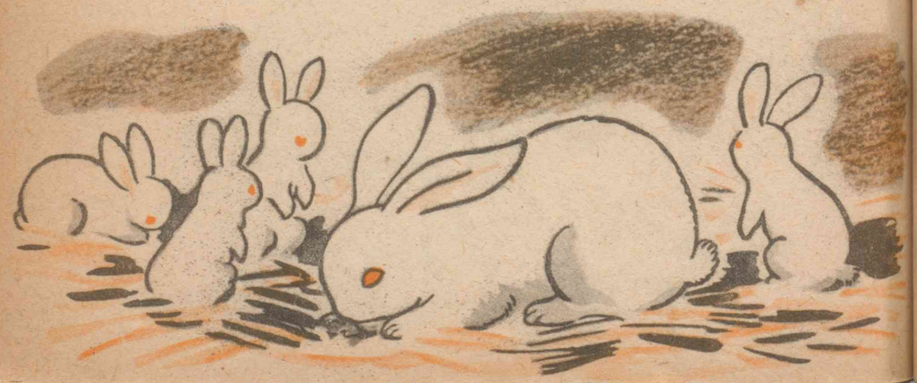
私は、とびあがるほどうれしくなりました。
いそいでげたをはいて、にいさんといっしょに、うさぎ小屋へ走っていきました。
「しずかにしなきゃ、だめだよ。」
にいさんが、小さな声で、ささやきました。
うさぎ小屋には、むしろがかけてあります。それをもちあげて、そっとのぞいてみましたが、うすぐらくて、よく見えません。
「あかちゃんは、どこにいるの。」
「よく見てごらん。おくの、すみの方を。」
おやうさぎのかげに、わらくずだの、おやうさぎの毛だ

のが、まるくかたまって、小鳥のすのようになっています。
その中に、小さな赤いものがかたまって、うようよ動いていました。
「あら、あれがあかちゃんね。」
私が思わず大きな声を出したので、にいさんは、
「しっ。」
といって、ゆびで口をおさえて見せました。
うまれたばかりのあかちゃんは、赤はだかです。目も、



まだあいていません。
「なんびきうまれたの。」
「八ひきぐらい、いるようだね。」
こういって、にいさんは、うさぎ小屋のむしろをおろそうとしました。
「あら、つまらないわ。もっと見せてちょうだい。」
「だめだよ。おやうさぎがびっくりすると、あかちゃんをたべてしまうことがあるんだって。だから、そっとしておいてやらなきゃいけないんだよ。」
「まあ、どうしてでしょう。」
私は、ふしぎでたまりませんでした。

二しゅうかんばかりたつと、うさぎのあかちゃんにも、やわらかな、白い毛がはえそろいました。かわいいおめめもあきました。
お天気のよい日には、しきわらの上を、ちょこ、ちょこあるいて、遊んでいます。
小さくて、かわいくて、まるで、おもちゃのうさぎさんのようです。
おなかがすくと、おやうさぎのおなかの下にもぐりこんで、上になったり、下になったり、大さわぎをしながら、おちちをのんでいます。



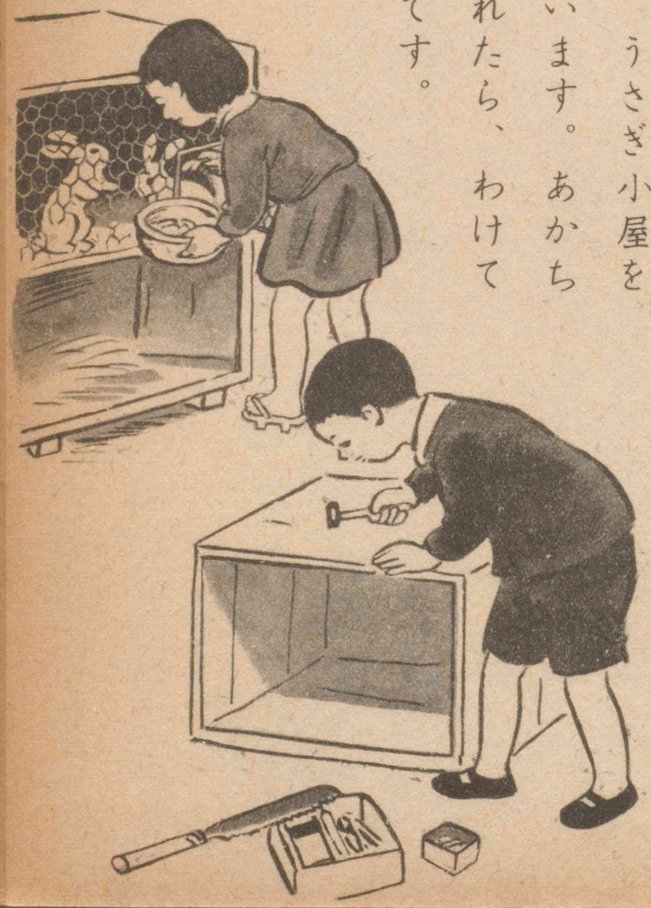
でも、こんなにおおぜいのあかちゃんに、おちちをのまれると、おやうさぎも、おなかがすくにちがいありません。

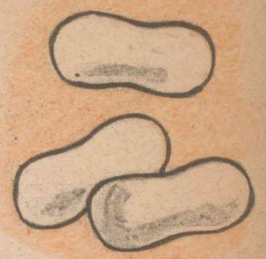
私は、学校からかえると、毎日、野原へうさぎのえさをとりにいきます。たんぽぽ、あざみ、くずのは……。おいしそうな草を、かごいっぱいとってきます。

おやうさぎは、私が草をとってきたのを見つけると、前足で、金あみをカリカリひっかいて、よろこびます。

「たくさん、おあがり。そして、おいしいおちちを、たくさん出してちょうだい。」

にいさんは、毎日、うさぎ小屋をつくっていらっしゃいます。あかちゃんがおちちをはなれたら、わけて入れてやるのだそうです。





かいこのゆめ

みえ子さんのうちでは、みんなでまゆむしりです。みえ子さんも、おかあさんのとなりにすわって、お手つだいをしています。

わらで作ったすからむしりとったまゆは、もやもやした、やわらかいわた毛のようなものにつつまれています。それをゆびにまいて、くるっとまわすと、かっこうのよい、白いまゆになります。

みえ子さんは、てのひらにのせて、しばらく見とれていました。

「おかあさん。この中に、おかいこさんがはいっているのですか。」

ついこの間までくわをたべていた、あのおかいこさんが、一ぴき一ぴき、みんな、こんなおうちを作ってはいったのかと思うと、なんだかふしぎですので、おかあさんにおたずねしました。

「ええ、ええ、そうですよ。そっとふってごらんなさい。」

みえ子さんは、まゆを、耳のところで、そっとふってみました。すると、コトコトと、かすかな音がしました。みえ子さんは、にっこりして

「おかあさん、おかいこさんは、この中で、おねんねしているんですね。」

といいました。

おかいこさんが目をさますのをしんぱいするように、小さい声でいったものですから、おかあさんも、おとうさんも、それから、にいさんや、ねえさんも、おわらいになりました。

「ええ、ええ。おねんねですよ。」

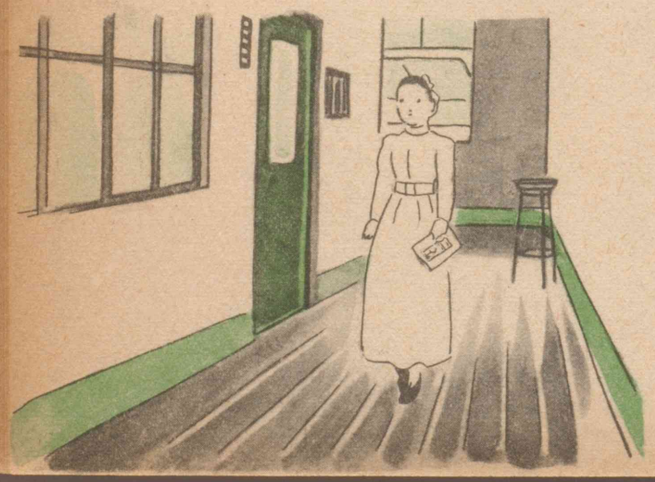
「おかいこさんは、ずいぶん長い間おねんねするのですね。ゆめだって、たくさん見るでしょうね。こんな白い、きれいなおへやで、どんなゆめを見ているのでしょう。」

「みえ子さんは、おもしろいことをいいますね。」

みえ子さんは、きょ年、おじいさんがご病気のとき、おみまいにいった病院のことを思い出しました。

かべも、てんじょうも白ければ、かんごふさんのふくも白いのです。

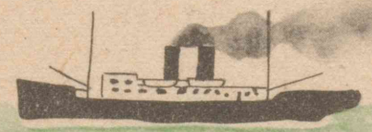
「病院のゆめかしら。」



「病院のゆめなんか、おかいこさんが見るものか。」
にいさんが、わらいだしました。
「では、どんなゆめ。」
みえ子さんは、まじめなかおで、にいさんにききました。
「そうだなあ。」
にいさんは、こまりました。
すると、おかあさんが、にこにこしながら、
「きれいな着物になったゆめかもしれないわ。」
とおっしゃいました。
「ねえさんが、およめにいったとき、着ていたような、きれいな着物になったゆめを見ているのですか。」

こんどは、おとうさんが、そばから、
「うん、それから、海をわたって、アメリカへいくゆめを見ているかもしれないよ。」
「まあ、アメリカへ。」
目の青い、金色のかみの毛をした、かわいい女の子が、うすい、すきとおるようなふくを着て、ばらの花をもっている……。そんなえを、みえ子さんは、え本で見たことを思い出しました。
「おかいこさんは、そんなゆめも見るのですか。」

みえ子さんは、おどろいて、おかあさんのかおを見ました。それから、手のひらの白いまゆを、そっとなでました。



かまきりのたんじょう

ぼくは、妹と、おとうさんと、三人でさんぽに出かけました。

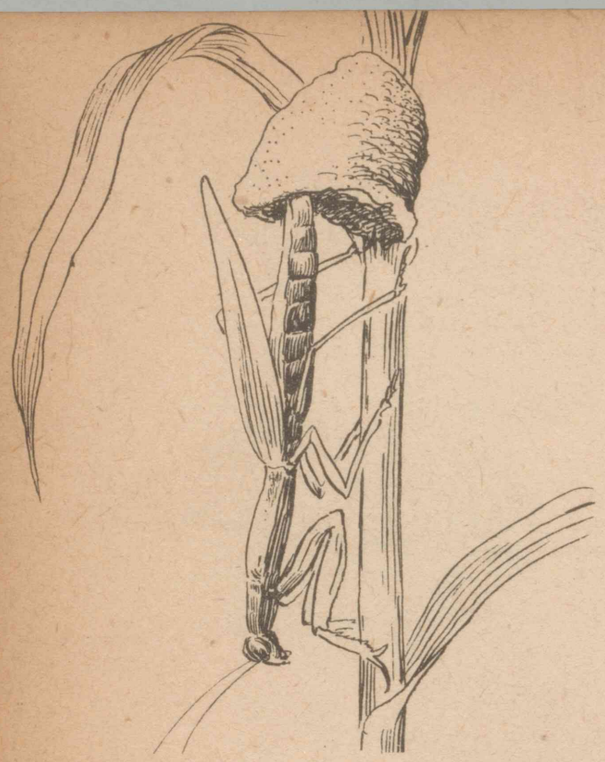
ほの出そろった麦畑の中を通って、林の中にはいると、林の中は、わか葉のにおいでいっぱいでした。

ぼくは、ふと、かれたすすきのくきに、まるいふのようなものがついているのを見つけました。

「おとうさん、これはなんでしょう。」

「ほほう。これはかまきりのたまごだ。」

ぼくは、あのやせたかまきりが、こんな大きいたまごをどうしてうむのだろうと思い



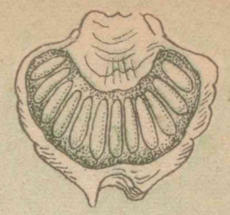
ました。

おとうさんにそのことをたずねると、おとうさんは、

「これは、かまきりがたまごをうみつけるために、おしりから出したあわのかたまったものだ。たまごはこの中にたくさんはいっているのだよ。」

とおっしゃいました。

「外から見ると、こんなぶかっこうなかたまりだけれど、中は、なかなかきちんとできているよ。さ



あ、中をさいてみようか。」
と、おとうさんは、ていねいに、そのかたまりをさいてごらんになりました。
かたまりの中には、どこにも、すきまがないように見えますが、気をつけて見ると、外がわに、たてにならんだいくつものあながあります。たまごのあるところは、たんすのひきだしをぬいたあとのように、いくだんもの、へやにわかれていて、どのへやにも、たまごが一列にきまりよくならんでいます。

「こんなにならんでいるたまごのへやには、一つ一つ外へ出る口がついているわけだ。こんなうまいしかけを、かまきりはおしりの先で作るのだからね。」
ぼくはかんしんして、かまきりのたまごのくみたてをよく見ました。
「では、おとうさん、このあなからかまきりの子は出るのですね。」
「そうだ。このすきまから生れ

るわけだ。」

おとうさんは、さいたかまきりのすを見ていらっしゃいましたが、

「これをごらん。もう目のたまも見えるようになっているよ。」

とおっしゃいました。

なるほど、中のほそ長いたまごは、もう目のたまや、そろえている足が、わかるほどになっていました。

「では、かまきりの出るのも、もうすぐですね。おとうさん。」

「そうだ。五月のおわりには、みな出るだろう。」

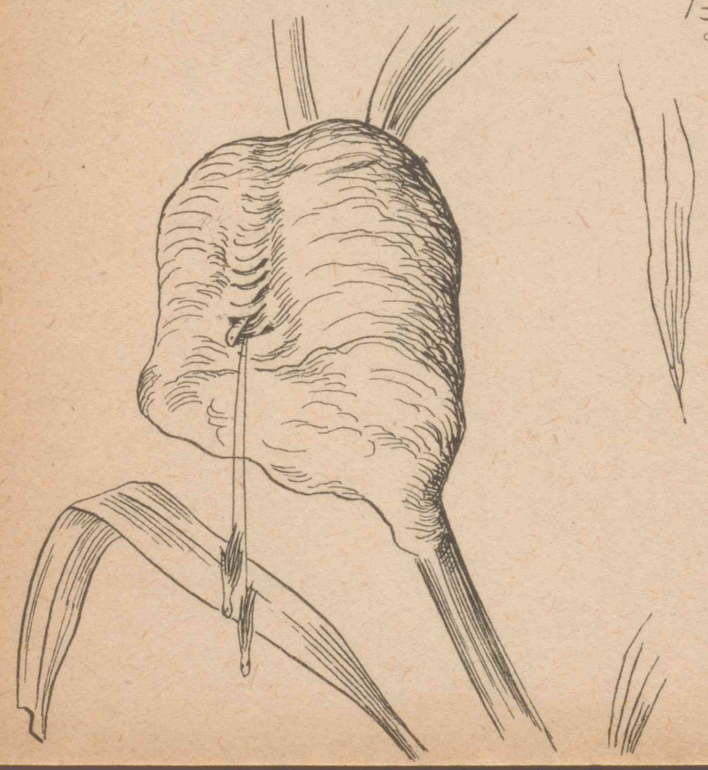
ぼくが、おとうさんとこんな話をしていると、急に妹が大きな声をあげてよびました。

「おとうさん、何かへんなものが出てきましたよ。ここから、こんなにぶらさがって。」

「どこ。」

ぼくものぞきこみました。

妹のさし出したかまきりのたまごからは、ほそい糸をひいて、あめ色の小さい



ものが一つぶらさがっています。くの字がたにまがった、一センチにもたりない、小さいものです。

おとうさんは、

「やあ、これはよいところに出あったね。かまきりのたんじょう日だよ。まあ、おちついて、見ることにしよう」。

とおっしゃって、そこへこしをおろしました。

「これが、かまきりの子」。

「へんだなあ」。

ぼくと、妹は、思わず声をたてました。

かまきりの子は、黒い目のたまが二つ、小さいへびのような顔のりょうがわについています。長い足は、きちんとたばのようにそろえて、からだの下がわにくっつけています。どう見ても、これがかまきりの子だとは思えませんでした。

手にのせると、ぴくり、ぴくりと、くの字がたのからだを、のばしたり、まげたりしています。

「ごらん、つぎのが生れるよ」。

と、おとうさんがおっしゃいました。

見ると、さっきのあなから、小さいあわつぶほどの頭が
まわりをおしひろげるようにして出てきました。
頭をたてにふるたびに、少しずつ、からだが出てきます。
すっかり出てくると、すうっと、四五センチほど糸をひい
てさがりました。
あとから、あとからと、かまきりの子は生れてきます。
ぼくは、おもしろくてたまりませんでした。
しばらくすると、はじめて出てきたかまきりの子は、か
らだにくっつけていた足をはなして、よろよろと立ちあが
ろうとしました。
生れたばかりの時には、一センチにもたりないと思った

からだは、いつのまにか、はじめの
二ばいほどになっています。その上、
へびのようだった頭のかたちも、す
っかりかわって、小さいながら、目
だまのとび出した、三角なかまきり
の頭になっていました。
「やあ、すっかりかまきりだ。」
おとうさんも、おもしろそうに、
大きな声をおたてになりました。
立ちあがりかけたかまきりの子は、
一二度よろよろとしましたが、やが

て、四本の足をふんばって歩きだしました。
見ると、あのまがったかまも、りっぱにそろって、小さいながら、親そのままのかっこうです。
あとから、あとから、生れてくるかまきりの子は、しばらくして、すっかりりっぱになって、歩きはじめました。
中には、なまいきそうに、ぴょんと、とんだりするのもあります。
「かわいいわね。」
と、妹がいいました。
ぼくは、
「この小さいのが、秋になると、すっかり大きくなって、

こわいかっこうになるのだからなあ。」
と思いました。
ぼくと妹は、かまきりの子を、たいせつに、持って帰りました。

きれいな水

泉

かがみのような水に、
わかばがうつっている。
雲のかげもうつっている。
きよらかな泉。

そよ風がふくと、
しずかに水がゆれる。
わかばや、雲のかげもゆれる。

やぎをつれたこどもが、
じっと立ちどまって、
泉の水を見ている。

このきよらかな泉は、
どこからわいてくるのだろう。

水遊び

野原のたんぽぽもほおけました。白いたね毛が、ふわりふわりと、とんでいきます。

「じゅんぺいくん、たんぽぽのふんすいを作ろうか。」

「うん。」

たいちくんは、流れのそばの少し高いところに、小さないどをほりました。

じゅんぺいくんは、その間に、たんぽぽのくきをつなぎあわせて、ひらがなの「ひ」の字のようなかたちにしました。

「できたかい。」

「できたよう。」

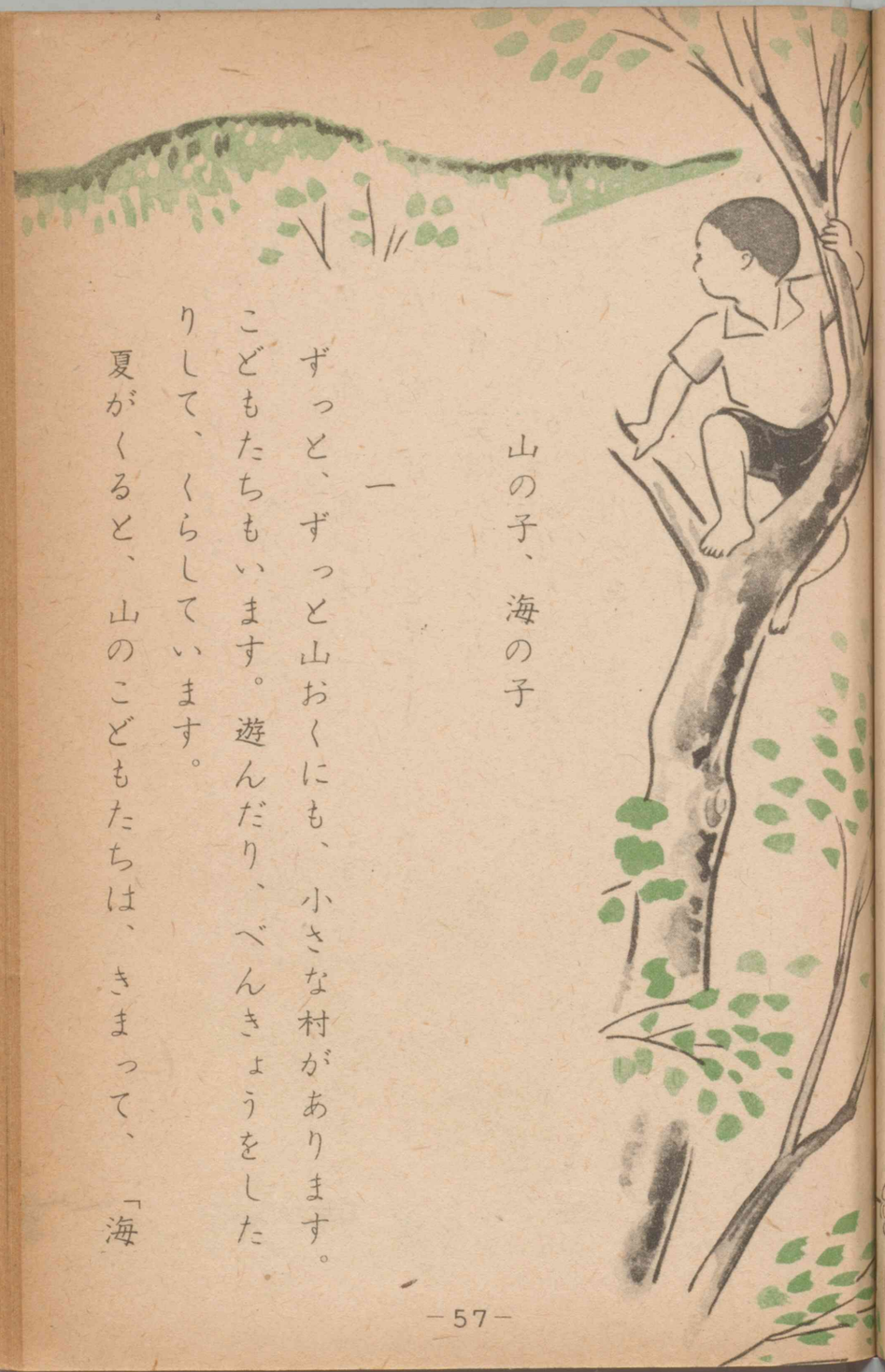
じゅんぺいくんは、たいちくんのほったいどに、たんぽぽのくきの太い方を入れました。

「さあ、ぼくがすうよ。」

たいちくんは、くきの先を、ちゅっとすいこみました。

水は、いせいよく、とび出してき

ました。
「わあ、出た、出た。」
「これで水車をまわそうか。」
水車も、たんぽぽで作りました。
くるくるくる
小さな水車も、たんぽぽのふんすいの水でまわります。
くるくるくる
水車に、ふんすいの水がおちていくところに、きれいな、
小さなにじがたちました。



山の子、海の子

一

ずっと、ずっと山おくにも、小さな村があります。こどもたちもいます。遊んだり、べんきょうをしたりして、くらしています。

夏がくると、山のこどもたちは、きまって、「海

が見たいなあ。」と思いました。話には聞いたことがあるけれど、まだ、海を見たことがないのです。

じろうという、木のぼりのじょうずな子がいました。

ある日、高い、高い木のてっぺんにのぼって、海をさがしました。が、どっちを見ても、山と山がかさなっていて、あとは、青い空ばかりです。

じろうは、がっかりして、木からおりました。すると、すぐそばに、たに川がありました。いつも、およいだり、魚をとったりする川です。川は、まがりまがって、ずっと南の方へ流れていました。南の方に、ひろい、ひろい海があるということです。

「あ、そうだ。」

じろうは、いいことをかんがえました。家へとんで帰って、友だちを集めました。みんなとそうだんして、手紙を書くことにしました。山のこどもから、海のこどもへおくる手紙です。

一人の男の子は、

「海って、どんなかなあ。ぼく、大波をくぐって、思いきりおよいでみたいなあ。」

といいました。一人の女の子は、

「わたし、海岸でかいがらをひろってみたいわ。それから、すなの上で、おままごとがしてみたい。」
といいました。すると、じろうがわらって、
「きみたち、そんなことを考えているのかい。ぼくはね、大きくなったら、海へいくんだ。海へいって、大きなふねを走らせるんだ。」
といいました。
まもなく、海のこどもへおくる手紙ができました。小さくたたんで、あきびんにいれました。かたくせんをしめました。せんのまわりには、ろうそくのろうをたらしました。これで、すっかりいいのです。

びんを持って、こどもたちは、たに川の橋の上へとんでいきました。
「どうか、海のこどもにとどくように。」
こどもたちは、びんをたに川へおとしてやりました。
夏の日をうけて、びんは、きらきら光りました。ういたり、しずんだりしながら、すぐ見えなくなってしまいました。でも、こどもたちは、いつまでも、橋の上に立って、見おくっていました。

二

流れの急なたに川を、びんは、どんどん、くだっていきました。

なんども、かたい岩にぶつかって、もうすこしで、こわれそうになりました。

高いたきから、まっさかさまにおとされた時には、すっかり目をまわしました。そして、ながいこと、あわのたつうずまきの中に、まきこまれていました。

なにか、おいしいえさとまちがわれて、魚においかけられたこともあります。

川のたびは、夜もつづきました。くらいひとりたびでも、

びんは、ちっともさびしくありませんでした。ふところに、こどもたちの、あたたかい、やさしい手紙を持っているからです。

「早く海へ流れついて、中の手紙を、海のこどもにわたしてあげたい。」

と、そのことばかり考えていました。

山のふもとが近くなったのでしょう。川の中に、岩がなくなりました。まがりもすくなくなって、川はばが、だんだんひろくなりました。

大川へ出てしまえば、しめたものです。しずか

な、ひろい流れは、びんを、あんぜんに海へおくってくれるでしょう。

けれど、こまったことができました。もうすこしで、大川へ出るというところに、大きな木が、とうせんぼをしていたのです。

びんは、そこでつかえてしまいました。あいにく、日でりがつづいていました。雨がちっともふらないから、川の水がとてもたりないのです。大きな木も、流れることができなくて、こまっていました。

いそぐたびなのに、びんは、先へすすむことができません。しかたなく、じっとまっていました。

三

すると、お日さまが、びんを見つけました。

びんは、木につかえて、きらきら光っています。

お日さまは、

「川の中にびんがいるとは、ふしぎだ。」

と思いました。そこでお日さまは、びんの中をすかして見ました。お日さまなら、中の手紙を、よむことができます。

お日さまはよんでみました。

ぼくたちは、山のこどもです。

ぼくたちは、海が大すきです。けれど、まだ、

海を見たことがありません。海は、どんなけしきでしょう。

海の色は、青いそうですが　空のような色ですか。海はどんなにおいがしますか。海には、どんな鳥がとんでいますか。それから、どんな花がさいていますか。海岸はすなばかりですか。波は、どんな音をたてますか。海のようすを、おしえてください。

ぼくたち、山のこどもは、毎日、木のぼりをしたり、たに川で魚をとったりしています。それから、まきをきったり、すみやきのお手つだいもします。また、畑のしごとも、手つだいます。山の畑は、急なさかや、がけのようなところにばかりあります。

山の上で、木のぼりをしているえを送りましたから、海のえを書いて送ってください。海からの手紙をみんなでまっています。さよなら。

これをよんで、お日さまは、かわいそうに――と思いました。そこですぐに、雨ふり雲をよびました。まっ黒な雲です。

お日さまは、

「大いそぎで、たくさん、雨をふらしておくれ。」と、たのみました。そして、じぶんは、いそいで、雲のかげにかくれてしまいました。

雨ふり雲は、よろこびました。このあいだから、ずいぶん雨がたまっています。おもくてたまりません。

「一度に、ざあっと、おとしてやろう。」

雨ふり雲は、思いきりふりだしました。山という山へ、ざあ

ざあふりかけました。すごい夕立です。どの山も、にぎやかな夕立の音で、なにも聞えなくなりました。

みるみるうちに、たに川の水が、いっぱいにあふれました。流れが、急につよくなって、ぐんぐん走っていきます。

そのいきおいで、つかえていたびんも、やっと、おし出されました。

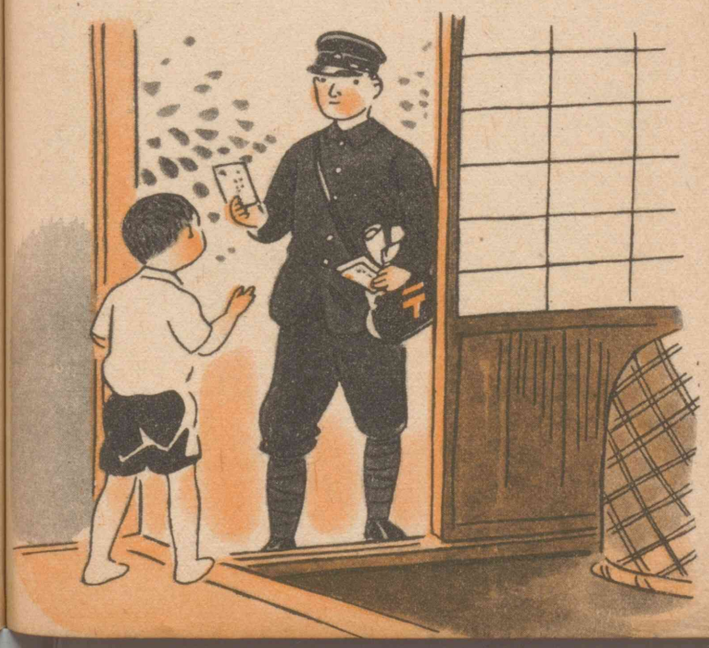
すぐに、大川へ出ました。前よりずっと早く、びんはかけ足で、流れていきました。

こうして、夜も、ひるも、川のたびはつづきました。山からの手紙をしっかりだいて、びんは、どんどんくだっていきました。海へ、海へといそぎました。

四

山では、じろうも、友だちも、みんなまっていました。海からのへんじをまっていました。が、へんじは、なかなかきませんでした。

五日まってもきません。十日たちました。きません。十五日すぎました。きません。けれど、十八日目に、やっときました。海からのへんじ、おもい手紙がとどきました。ゆうびんはいた



つのおじさんが、とどけてくれました。

じろうは大声で友だちを集めました。みんなでよみました。

海からのうれしい手紙を、みんなで声をたててよみました。

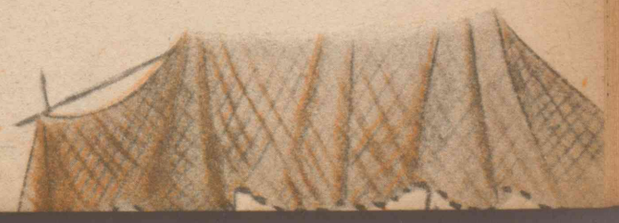
びんは、ぼくたちがひろいました。手紙も、えも、水にぬれないで、ちゃんとはいっていました。ありがとう。うれしくて、みんなでよみました。

ぼくたち、海のこどもも元気です。

毎日、ふねをこいだり、およいだりします。ぼくたちも、魚をほしたり、はこんだりして、お手つだいをします。海には、いろいろな魚がいますよ。

海は、青くて、きれいです。空のようです。ひろくて、むこうが見えません。夜も、ひるも、ゴーゴーとなっています。大声で、勇ましいうたをうたっています。

ぼくたちは、山もすきです。けれど、まだ、山へのぼったことはありません。このえのような、高い木の上にのぼってみたいと思います。



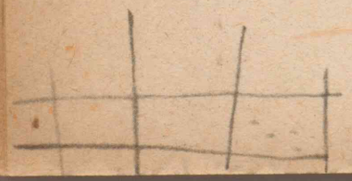
山では、すずしい風がふくでしょう。海にも、すずしい風がふきます。遠い遠い、海のまん中からふいてくる風です。

山には、どんな花がさいていますか。海には、日まわりや、月見草が、いっぱいさいています。

山には、どんな鳥がとんでいますか。海には、かもめがたくさんいます。冬になると海のあれる日がつづきます。山もあれるでしょうね。

大きくなったら、海へいらっしゃい。ぼくたちも、大きくなったら、山へ出かけます。

きみたちの山を流れた川が、ぼくたちの村を



流れて、海へそそぎます。きみたちのおよいだ水で、ぼくたちもおよいでいます。では、さようなら。

おさかなが、むかしすんでいた川をさかのぼるようにして、山へ着いた海の手紙です。山のこどもたちは、なん度もよみました。

海の子たちが、海でおよいでいるえもありました。かいがらも、月見草のおし花もはいっていました。

山のこどもたちは、海のゆめを見ながら、ねむるでしょう。青い海のゆめは、どんなゆめでしょうか。

げき

星とおにたち

—かみなりの音がして、まくがあく。

—夕立雲にのった赤おに青おにが、いそがしそうにはたらいている。

赤おに一・二・三は、大きなじょろで雨をふらせている。赤おに四・五は、大だいこや小だいこをたたいて、かみなりの音を出している。青おに六・七は大きなうちわで風をおこし、青おに八は、大きなかいちゅう電燈で、いなずまの光を出している。

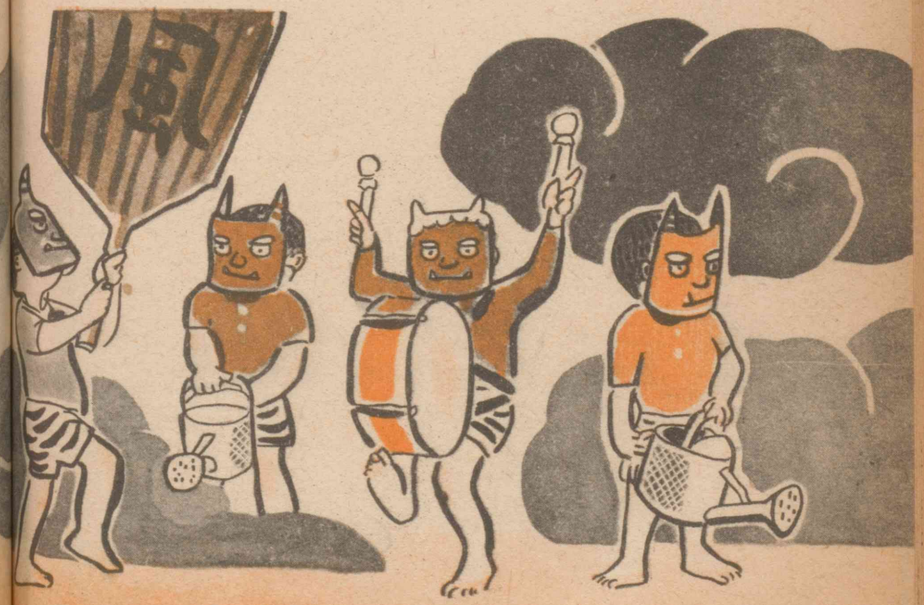
おに八　（かいちゅう電燈をはげしくふりながら）「もっとたたけ。もっとふらせろ。森のけものがさわいでいる。鳥がこわがってにげているぞ。」

おに一　（水をまきながら）「どこだ、どこだ。こう黒雲が集まっては、けんとうがつかない。」

おに六　（うちわで、下の方をあおぎながら）「どこだってかまうものか。どんどんふらせろ。」

おに二　（じょろの中を見て）「おいおい、そんなにいったって、雨は、あと少ししかないんだぞ。」

おに三　「なに。」（と、自分のじょろをのぞいて見て）「あ、ほんとだ。おい、みんな、もうすぐ水がなくなるぞ。」



おに八　「なあんだ、もうないのか。せっかくおもしろくなりはじめたのに。」

おに四　「しようがないなあ。（おに五に）それじゃ、よそう。」

おに五　「うん。」

―おに四・五、たいこをたたきやめて、あせをふく。

おに八　（かいちゅう電燈をこしにはさみながら）「ああ、つかれた。」

おに五　「ずいぶん光らせたね、きょうは。おれも、手がいたくなるほど、たたいたからなあ。」

おに三　（じょろの水をきりながら）「雨、かみなり、風といっしょだから、下では、みんなきもをつぶしただろう。」

おに二　（のこりの水をまきながら）「でも、ラジオの天気よほうは、よくあたったなあ。『らいうになっても、すぐ晴れます』といっていたが、そのとおりだ。人間も、あんがいかしこいところがある。」

おに一　「ふん、かしこいかどうかしらないが、その人間どもが、このごろでは毎日、たいこをたたいたり、火をたいたりして、雨ごいをしている。」

おに六　「ははは……。なんといっても、おれたちにはかなわないのだ。」

おに七　「おい、なんだかいいにおいがするぞ。（と、はな先でうちわをそっと動かす）　ははあ、草のにおいだ

な、木のにおいだな。」

おに四「うん、におってくる、におってくる。雨水をうんとすいとって、草や木が生きかえったのだな。どうだ、下が見えるか。」

おに七「黒雲はきれたが、くらくてはっきりしない。」

おに三「おや、もう、そんな時間か。（空を見て）なるほど、そういえば、もう星が出ている。」

—おにたち星空を見る。

おに八「こん夜も星がきれいだなあ。おれは、ゆうべなど、ねむりつくまで、あまの川を見ていた。」

おに一「おれもそうだ。あれは名まえのとおり、まるで空の

上を、大きな川が、きらきら光りながら、流れているようだ。」

おに八「川というより、銀の橋だな。光った橋が、天いっぱいに、かかっているようだ。」

おに二「ところで、あんなにたくさんある星に、なにがすんでいるのだろう。」

おに四「さあ、なにか生きものがいるんだろう。」

おに二「やっぱり、角を持っているだろうか。」

おに五「そりゃ、持っているのもいるだろう。人間のいるところにだって、うしや、しかがいるじゃないか。」

おに一「角があったところで　おれたちほどりっぱなものじ

ゃないだろう」。

おに七「力も人間くらいかな。」

おに六「そんなものだろう。天にも地にも、おれたちほどつよくてりっぱなものは、いるはずがない」。

おに二「あたりまえだ。」

―おに三、空を見あげているが、おに二のことばがおわると「あっ」と声をたてる。とたんに大きな音がして、天から星がふってくる。みんなびっくりして、頭をかかえてすわりこむ。

―おちてきた星、一度立ちあがるが、よろよろとたおれる。

―しばらくして、おにたち、こわごわ頭をあげる。星を見ると、みんなおそれて、あとずさりする。

おに一「な、なんだろう、これ。」

おに三「ああ、おどろいた。天からふってくるなんて、こいつは、星のばけものだ。」

おに六「なに、星のばけもの。」

おに三「そうだとも。」

おに五（そっと星に近づいて）「そうかもしれない。へんな顔だ。」

―みんな近づいて星の顔を見る。

おに「そういえば、星が頭にくっついているぞ。」

おに七「角のかわりだろう。」

おに一「からだが、赤くも青くもないというのが、へんじゃないか。」

おに二「それに、口も、目も、はなも小さくて、まるで、人間みたいだぞ。」

おに三「どこから見てもふつうじゃない。たしかに星のばけものだ。」

おに八「おや、口を動かしているぞ。」

おに二「まだ生きているんだ。よし、少し水をのませてみよう。」（と、じょろをとる）

おに五「まてまて。生きかえったら、あばれるかもしれない

ぞ。」

おに六「そうだ。みんな、かなぼうを持ってこい。」

―「よし。」と、おにたち、雲のかげから大きなかなぼうをとりだして　いつでもふりおろせるように用意する。

おに二「いいか、それではのませるぞ。」（と、おそるおそる、じょろの口から、星に水をのませる）

―星が「ううん」どうなる。おにたち、びっくりしてとびのく。星が動かないので、また、いそいでかなぼうをふりあげる。

―おに二、また水をのませる。星、やっと気がついたらしく、からだをおこして、あたりを見まわす。

星　「あ、ここ、雲の上。」

おに一　（かなぼうをふりあげたまま）「そ、そうだ。なんだおまえは。」

星　「……」（だまって立ちあがり、足やこしをさする）

おに三　「こら、どこからきた、ばけものめ。」

星　「わたし、流れ星よ。でもよかったわ、雲の上で。」

おに五　「ふん、やっぱり星の国からきたんだな。」

星　「ええ、でもばけものじゃないわ。」

おに八　「でも、角がないじゃないか。」

星　「あら、わたしたち、角やかなぼうなんて、いらないわ。ほかのものとあらそうことなんか、ないんですもの。」

おに六　「なんだ、頭にくっつけているのは。」

星　「星よ。」

おに八　「それが、あんなに空で光っているのか。」

星　「ええ、わたしのも、お友だちのも光っているし、星の国では、山も、川も、みんな光っているわ。」

おに五「きみの口、どうしてそんなに小さいんだ。」
おに七「そんなに小さい目では、遠くは見えないだろう。」
星（わらって）「この口で、なんでもいえるし、この目で、なんでも見えるわ。」
おに三「へんだなあ。」
おに四「ふしぎだなあ。」
おに二「はじめて人間を空から見た時、へんな生きものがいるとおどろいたが、世の中って、ひろいものだなあ。きみみたいなものもいるんだから。」
星「あなたたちはあなたたち、わたしたちはわたしたち。すがたやようすのちがったものは、いくらでもいるわ。でも、あなたたちとちがって、わたし、だれを見てもおどろかないわ。いつも天から見ているんですもの。どこの国のどんな人にあっても、ちっともへんに思わないわ。」

おにへ「へえ、あんな高いところにいたら、なんでも見えるだろう。」
星「なんでも見えるわ。」
おに四「おれたちみたいなの、ほかにもいるかい。」
星（わらって）「あんまりいないわ。」
おに六「おれたちより、もっと強いものがいるかい。」
星「いくらでもいるわ。」

おに一　「そうかなあ。天から見たら、おれたち、ちっぽけに見えるだろうね。」

おに六　「かなぼうをふりまわしたって、星まではとどかないし。」

おに五　「下ばかり見て、人間やけものをばかにしていたけれど、そう聞くとはずかしいね。」

星　「だって、あなたたち、きょうも夕立をふらせて、みんなをよろこばせたんでしょう。りっぱなことよ。」

おに五　「そうかなあ。」

星　「そうよ。」

おに三　「ところできみはどうするの、いまから。」

星　「さあ。（と、空を見あげる）帰りたいけれど、もうだめだわ。」

おに二　「そんなことはないよ。」

おに四　「どうだろう。この雲を、天までのぼらせては。」

おに六　「そうだね。みんなで力をあわせて、この星の人を送ってあげよう。」

星　「でも、そんなことをしていただいて、わるいわ。」

おに一　「いいんだよ。きみがきてくれたので、よその世界のことまでしったんだし、なんだか心の目がひろくなった。おれいに送ってあげるよ。」

おに五　「そうだとも。」

おに六　「ちょっとまってくれ」。

—おに六・七、雲のかげから大きなうちわをとりだして、みんなのおにたちにわたす。

おに七　「さあ、ふきとばされないように、その雲のかげにかくれてくださいよ。いまから、みんなで雲をとばせるから」。

星　「それではおねがいするわ」。

おに六　（と、かげへかくれる）

「さあ、みんなこっちへ集まって」。

—みんなのおに、一列にならぶ。

おに七　「そら、いいかい。一・二・三」。

—みんな、うちわであおぎはじめる。

—風の音がだんだん高くなってまくになる。

ことばの表

○アウト……十五
あきらめる……十五
あざみ……三十
あわ……四十一
あめいろ……四十五
あわつぶ……四十八
あんぜん……六十四
あいにく……七十三
あれる……七十九
あまごい……八十
あまのがわ……八十二
あたりまえ……八十三
あとすさり……八十九
あばれる……八十四
あらそう……八十七
○いけん……九
いいん……十
いけない……十三
いきもの……十八
いんさつ……十九
いもうと……三十九
いずみ……五十二
いなずま……七十五
いきかえる……八十
○うようよ……二十七
うお……五十八
うずまき……六十二
うなる……八十五
○えんがわ……二十五
えさ……三十
○おなか……二十九
およめ……三十六
おちつく……四十六
おしひろげる……四十八
おく……五十七
おもいきり……五十九
おそれる……八十三
おれい……九十一
○かすみ……七
がくきゅうにっき……八
かかえる……十
かいしゃ……二十二
かたまる……二十七
かなあみ……三十
かいこ……三十二
かすかな……三十四
かんごふ……三十五
かまきり……三十九
かれる……四十
かたち……四十九
かがみ……五十二
かいがん……六十
かいがら……六十
かたく……六十
かもめ……七十三
かみなり……七十五
かいちゅうでんとう七十五
かまう……七十七
かなう……七十九
○きぶ……八
きまる……九
きまりわるい……十二
キック・ボール……十二
きかい……十二
きんいろ……三十七
きよらかな……五十二
きも……七十八
○くもり……十
くるう……二十一
くず……三十
くみたて……四十三
くらす……五十七
くだる……六十二
○けっしょう……十六
げた……二十六
けしき……六十六
けもの……七十六
けんとう……七十六
○こや……二十五
こわれる……六十二
こう(して)……六十九
○さくら……四
さかなや……五
さげる……十三
さいご……十五
ざっし……二十五
ささや く……二十六
さしだす……四十五
さんかく……四十九
さか……六十七
さかな……七十四
さする……八十六

○しゅうかん……九
しあい……十四
しゅやく……十九
しまう……二十
しっぱい……二十
しきわら……二十九
じ……四十六
じょろ……七十五
○す……二十七
すく……二十九
すきとおる……三十七
すいしゃ……五十六
すかす……六十五
すごい……六十九
すいとる……八十
○せんきょ……六
せんしゅ……十二
せん……十五
○そんちょう……六
そつぎょう……二十一
そろえる……四十四
そそぐ……七十四
○たたみ……十八
たまる……二十八
たまご……四十
たて……四十二
たんす……四十二
たま……四十四
たりる……四十六
たば……四十七
たにがわ……五十八
たたむ……六十
たおれる……八十二
○ちゃのま……二十
ちょうし……二十一
ちゅうがっこう……二十一
○つかむ……十七
つきみそう……七十三
つかれる……七十八
つぶす……七十八
○てほん……二十三
てんじょう……三十五
○とつぜん……十六
とけい……十七
とたんに……十七
とうしゃばん……十九
ど……四十九
とうせんぼ……六十四
○なびく……七
なげる……十八
なまいき……五十
なるほど……八十
○にっこり……二十四
にじ……五十六
○ばら……三十七
ばい……四十九
はげしく……七十六
ばけもの……八十三
ばか……九十
○ひろば……五
ひごい……五
ひきだし……四十二
ひまわり……七十三
○フット・ボール……八
ぶつかる……十八
ふしぎ……二十八
ふ……四十
ぶかっこう……四十一
ふんばる……五十
ふんすい……五十四
ふところ……六十三
○ベンチ……五
○ほうかご……九
ほ……三十九
ほそながい……四十四
ほおける……五十四
○まじめな……三十六
まっさかさま……六十二
○みごとな……十六
みとれる……三十二
みまい……三十五
○むしろ……二十六
むしる……三十二
○やくば……六
やせる……四十
○ゆめ……三十五
ゆうだち……六十九
ゆうびんはいたつ……七十
○よろよろと……四十八
よのなか……八十八
○らいう……七十九
○りょうがわ……四十七
○るいだ(二三ほん)……十六
○わらくず……二十六
わく……五十三

池 (5)　勝 (16)　遊 (29)　外 (41)　帰 (51)　考 (60)　強 (89)

毎 (7)　門 (17)　原 (30)　急 (45)　泉 (52)　橋 (61)

級 (8)　近 (18)　病 (35)　顔 (47)　流 (54)　送 (67)

晴 (8)　通 (18)　院 (35)　頭 (48)　太 (55)　勇 (72)

土 (9)　何 (21)　着 (36)　角 (49)　聞 (58)　遠 (73)

集 (12)　間 (22)　物 (36)　度 (49)　魚 (58)　電 (75)

回 (15)　社 (22)　妹 (39)　歩 (50)　波 (59)　燈 (75)

点 (15)　屋 (25)　畑 (39)　親 (50)　岸 (60)　銀 (81)

Copyright 1949, by
The Kyōiku Tosho Kenkyukai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

小国304

三年生の国語　上

Approved by Ministry of Education
(Date Oct. 22, 1949)

感謝

左の作品を本書に掲載させていただきましたことについて、著作者諸先生に心から感謝をいたします。

こどもの村……村野四郎氏
とけい……原　まさる氏
かいこのゆめ…福島逞雄氏
ひばりの子……村野四郎氏
かまきりのたんじょう…片山辰之輔氏
泉……深尾須磨子氏
水遊び……平野　直氏
山の子海の子…奈街三郎氏
星とおにたち…栗原一登氏

編者

東京都文京区大塚窪町東京高等師範学校附属小学校内
財団法人 教育図書研究会
理事長　東京高等師範学校教授　佐藤保太郎
担当執筆者　東京高等師範学校教諭　田中豊太郎
〃　花田幹哲
〃　青木幸勇
〃　森下厳
〃　小島忠治

表紙とさしえ　田原輝夫　田中壽太郎

昭和二十四年六月三十日印刷
昭和二十四年七月四日発行
昭和二十四年十月二十二日再版印刷
昭和二十四年十月二十六日再版発行

定価　円　銭

著作者　財団法人 教育図書研究会
会長務台理作

発行者　学校図書株式会社
代表者　川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八番地

印刷者　図書印刷株式会社
代表者　川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八番地

発行所　学校図書株式会社
東京都港区芝三田豊岡町八番地

文庫
49
766
広島大学図書
0130449766